

アイ子

なんね：

アイちゃんみたいな女を誰が相手にするとね。アイちゃんみたいに太か牛みたいいな女を買う客がおるとね。アイちゃんコケなんじやろ。

アイ子

あんたまで…。

大山

オリンピックが終わってもコケを続けちよったんやろ。コケっちゅうのは、客のつかん女のことやろ。確か仕事は掃除をしたり、ティッシュを持って隣の部屋で待つとったり、客の股ぐらに顔突っ込んで、あれつけろって言われたらつける、コケだったんじやろ。アイちゃん、立花に言われたんじやろ。お前と結婚しちやる。今はコケやらせちやるけど必ずお前と結婚しちやる。でも、立花はアイちゃんと結婚せんやった。じゃからアイちゃんは、立花を殺したんじやろ。

アイ子

あんた、スポーツマンをなめたらいかんばい。結婚を断られたぐらいで人殺すんじやったら、なんであげな辛か練習に耐えてこれるん？あんなに何が分かると？あんな小さい頃からあんな重い玉を投げさせられてきたうちの何が分かると？

大山

アイちゃんは、狂うちよりました。

大山、
去る。

アイ子

うちが初めて砲丸投げやらされたのは小学校四年の時ばい。ある日、先生が言うたとよ。「山口、お前んちは酒屋やし小さい頃からビールケース運んじよるから力が強いやろ。じゃけん今度のクラス対抗は砲丸投げに出てみる」そしたら八メートル飛んだばい。先生が「お前にはもしかしたら砲丸投げの才能があるかもしれん。砲丸投げの選手にならんね」って、辛かったばい。女の子にそんな才能があって何の自慢になるとよ。「これが最後じゃ、これが最後じゃ」って言われて無理矢理県大会に出されて、そしたらまぐれで十メートル飛んだばい。その時、東京から来とったまだ日体大の選手やった立花が「山口君、キミには砲丸投げの才能がありますねえ。一生砲丸投げをやって行きなさい」。…一生？ 一生ってあんな重い鉄の玉、どうやって一生投げていくん、たまらんかったばい。

「太れ太れ、力をつけろ」って言われて、どんどん食べてどんどん太ったばい。うちも十六歳の女の子じゃったけん、太ってばかりはいられんばい。化粧もしたかったしおしゃれもしたかったばい。

「コーチ。うち、もうやめさせて下さい」そう言ったとよ。そしたらコーチは「化粧はよか。お前は鉄の玉投げとったらよか。お前が目指すのは牛や馬じゃ。山口、よう考えてみ。牛や馬は化粧はせん」

「でもコーチ、うちは人間です」

「そげな甘い考えじゃ日の丸は挙げられん。まっ、いざとなったらオレが嫁さんに貰うちやるき」

「本当ですか！コーチ！」

「仮にもオリピックのコーチは嘘はつかん」その言葉を信じてうちは朝から晩まで投げ続けてきたとよ。

「山口、その砲丸がお前のアクセサリーじゃ。原宿に行く時もデイスコに行く時も持っていけ」じゃけんうちは、たまのデートの時もいつも砲丸ば持ってつとつたばい。成人式の時なんて晴れ着着て、砲丸ば持って写真に納つたばい。「そこのお嬢さんひとポーズ（カシヤ）、お嬢さんもうひとポーズ（カシヤ）、そこのお嬢さん、晴れ着と砲丸のコントラストがとってもいいねえ」（カシヤ。カメラのシャッター音と共にポーズをとる）

「さ、お嬢さん腕をまくって力こぶでひとポーズ。（カシヤ）そこのお嬢さんもうひとポーズ（カシヤ）お嬢さんこの写真をうちの写真館に飾ってもいいね」（カシヤ）

「はい！」（カシヤ）……。そこまですたんに、そこまですたんに立花は、日本海の荒波の吹きつける竜飛の崖で、

「山口お前はもう砲丸投げやめい。アトラクタには稲垣ば連れて行く」「じゃあコーチ、うちと結婚ばしてくれとですか」

「結婚はせん」

「じゃあコーチ、うちに嘘ばついたとですか」

「山口、よう考えてみい。仮にもオリピックのコーチが牛や馬と結婚はせん」

「じゃあコーチ、うちの青春ば返して下さい」

「山口、よう聞け、スポーツのいい所は、青春を返せんちゆうとこじや！青春を返せんちゆうとこじや！まあ気にすんな。こんな広い地球上であんな重い鉄の玉をたかだか二十メートルくらい投げられたからって一体なんの意味があるんじや。おうおう！青函連絡船じや！」それが十五年間育ててくれたコーチの言うことね。あるんよ、きつとあるんよ！そりやあ確かにうちも始めの頃は嫌で嫌で仕方がなかったばい。だけどあの直径十センチの鉄の玉を投げなければ分らない人生っちゆうもんが、青春ちゆうもんがあるんじやないかと気づいたとよ。じゃけん世界中の何千人何万人という女達が歯を食いしばって砲丸を投げとるんよ。あの黒い鉄の玉がドスンとよう飛んだ時は、うちの胸に突き刺さるもんがあったとよ。それが何か確かめるまでは、うちは砲丸を投げ続けなければいかんとよ。

アイ子の耳には競技場の歓声が聞こえる。大山、出てくる。

アイ子

砲丸投げは、砲丸投げは、顎の下につけて構えた金属製の砲丸を、直径二・一三五mのサークルの中から投射し、その距離を競う競技であります。砲丸の重さは男子七・五キロ、女子四キロ、直径九十ミリの物を使用します。始動動作はサークルの後方に立って静止し、次のグラインドに向け集中力を高め、右足に重心をのせ、左足先でリズムを取りながら、左脚を後方へ振り上げると共に、上体を前方に倒し、そ

の時、脚の後方振り上げと前屈、ひざの引きつけと前屈、以上の連続動作が行われるようにならない。

大山 お嬢さん。はい、ポーズ！（カシヤ）

アイ子 突き出し投げの動作は、

大山 お嬢さん。はい、ポーズ！（カシヤ）

アイ子 低い姿勢から一気に立ち上がり、

大山 お嬢さん。はい、ポーズ！（カシヤ）

アイ子 体をひねりながら身体のパネを利かせ、

大山 お嬢さん。はい、ポーズ！（カシヤ）

アイ子 腕を突き出し、突き出し終了と同時にサークルから飛び出さないよう、脚の踏みかえを行って静止しなければならない。

大山 お嬢さん、最後のポーズ！（カシヤ）

アイ子 （ポーズ）…金ちゃん。

大山 なんね。

アイ子 あん男が言うたよ。

「こん広い地球上であんな鉄の玉をたかだか二十メートルくらい投げられたからって一体何の意味があるんじや。おうおう！ 青函連絡船じや！」それを聞いた時、うちはもう何がなんだかわからなくなつてしもうて、そばにあつたヤシの実を持って「チキシヨウ！それがスポーツマンのいうことね！」立花めがけて投げたとよ。そしたらそれが、あん男の頭に命中して、あん男の頭から血が噴き出るのが見えたよ。…その位置から、うちの立つとつた位置までは二十五メートルはあつたばい。その距離がどういふ距離かわかるね。アルゼンチンの巨人、ブリスベン・F・ワイズの記録に勝つとつた距離ばい！うちがアトランタに行けば、金メダルは取れる距離ばい！

「山口アイ子勝ちました！ 山口アイ子勝ちました！今、日章旗が揚がつております！」

大山 アイちゃん…！

部長、花束を抱え、出て来る。速水も。

アイ子 これでうち、やっと砲丸投げ辞められるばい。あの鉄の玉から解放されるばい。いつもドスーンドスーンちゅう音に耳をつんざかれそうになつとつたとよ。ふと目を開けると、目の前に黒い大きい鉄の玉があつて、うちは押し潰されそうになつとつたとよ。毎日毎日、毎日毎日、そんな夢を見て、うちは、汗びっしょりかいて目を覚ましとつたとよ。…うちは疲れたばい。五島に帰れたか。長崎国体さえなきや、小さかつた頃の五島に帰れたか。

大山 七月十四日、熱海姫浜の波打ち際に立つ山口アイ子の白い足が、一歩、また一歩と波の中に消えて行きました。

アイ子 あつ、五島だ！

大山 夕日がきらめく波の中にどんどんどんアイちゃんは入っていったとです。

アイ子 きれいな山と、きれいな海と、青い空が見える。お父さんの配達の手ラックが見える。太ったお母さんが白いエプロンして店番しながら居眠りしてるのが見える。弟の宏がまたいじめられて椎の木の下で泣いているのが見える。小学校の鉄棒が見える。向日葵の花壇が見える。向日葵いっぱいの中に吉岡先生がいる。まゆみちゃんがいる。守くんがいる。ミツちゃんがいる。ミツちゃん！ ミツちゃん！ うちよ！ アイ子よ！ 縄跳びうちも入れて。うち、もうねえ、砲丸投げやらん方がいいようになったとよ！

大山 アイちゃん、そこは海ばい！
水野 離して！

大山 波はアイちゃんの首元まで押し寄せ、何度も何度もアイちゃんはオイの腕を振り払い、波のなかに消えて行きました。

アイ子 吉岡先生！山口アイ子です。まゆみちゃん、うちもう砲丸投げやらん方がいいようになったとよ。仲間に入れてえ。うち、やっと五島に帰れるようになったとよ。

大山 オイはアイちゃんに聞いたとです。

「見えるねアイちゃん、五島のあの白い空が、見えるねアイちゃん、五島のあの青い海が、見えるねアイちゃん、子供のころ遊んだ向日葵いっぱいあの花壇が」

オイはアイちゃんに言いました。

「アイちゃん。もう疲れたやろ。死んだ方がよかね」
するとアイちゃんはコクリと頷きました。だからオイはアイちゃんを五島に帰してやろうと思ったとです！

アイ子の首が締め上げられる。グキッ！

部長 よっしゃ！

音楽『パピヨンのテーマ』激しく鳴る。部長、花束で激しく大山を殴る。

速水、火をつけてた煙草を部長に差し出し、部長、タバコをふかす。

部長、大山に靴を向ける。大山は磨くのか舐めるのか、部長の靴に媚びた目で必死に靴に食らいつく。

速水 やめろ大山！

部長 どけ！

速水 (デスクを叩く) あんた恥ずかしくないんですか！

速水の手でタバコをもみ消し、大山を蹴り上げる。